

野牛はなしの動物を嫌す！アルタミラ洞窟のハイテク

「スペインと牛」について語る場合、闘牛と並んで忘れてはならないのが古代壁画で有名な「アルタミラの洞窟」で、この洞窟は、一万五千年もの昔、クロマニヨン人とよばれる人間の遠い祖先が生きていたころ、種族の長たちが集まって呪術を行っていた場所ではないかとみられている。

ここが、とくに世界の歴史学者や考古学者の注目を集めたのは、洞窟の壁いっぱい描かれた野獣の壁画で、その印象派的なタッチの勇壮な動物たちの絵は、美術史的にみてもすぐれて価値あるものといわれている。

話は一八六八年の晩秋、スペイン北部の町、サンタンデルからほど遠からぬサンティリヤナ・デル・マールの古城で、この地方一帯の所有者であるスペインの大貴族スルセリーノ・サウトウオーラが、アルタミラの山林でキツネ狩りを行っていた。ところが、彼の寵愛せうあいしていたイヌが見えなくなり、それを探しているうち、小高い丘のようになったところに穴がいていて、そこから冷たい風が流れ出していた。

穴の入り口の土にさわってみると、土はぼろぼろと落ち、穴はしだいに大きくなった。で、使いを城に帰してカンテラを持って来させ、内部を調べてみると、穴の中には穴あけ用の針

やキリ、モリ、けずり道具、ヤスリなどさまざまな生活道具がころがっていた。

もつと驚いたことには、両側の壁や天井一面に雄鹿や野牛など何百という野生動物の絵が描かれていたのである。

サウトウオーラは、そのご、毎日のようにこの洞窟に通い、この洞窟が先史時代のものであるとの確信を得、一八八二年、リスボンで開かれた先史学界で発表したのが、学者たちの誰からも相手にされず、これが一万五千年も前のスペイン人の祖先、イベロ族の残したものだと思われたのは、ようやく今世紀に入ってからのことだった。



この洞窟の壁画は、野牛や鹿などの立体感を出すために岩の凹凸やふくらみをたくみに利用するなど、現代のわれわれが見ても驚くほどの技巧と写実性を見せているほか、壁面に施した彩色用の顔料にも、一万年以上も大昔のものとは思えない、高度の技術が秘められていたのだった。その一つ、ホーンブラックは、牛などの骨を焼いて作った黒い顔料で、こんにちでも第一級の顔料として多くの画家たちに愛用されている。それがなんと、一万年以上も昔に作り出されていたのである。